

24歳 英語教師として来日  
30歳 ヴォーリス合名会社設立  
39歳 一柳満喜子と結婚  
61歳 苦悩の末、日本に帰化

vol. 16

## ウィリアム・メレル・ ヴォーリス

William Merrell Vories

### 揺るがぬ信仰と信念を胸に、 異国の地で捧げた生涯

琵琶湖からの水が、街に張り巡らされた堀を流れる近江八幡。白壁の家並に混じって、時折レトロな西洋建築が姿を現す。かつて城下町だったこの街に新風を吹き込んだのが、キリスト教の伝道師であり、建築家、実業家であり、社会事業家でもあったウィリアム・メレル・ヴォーリスである。

#### ▶▶▶ 建築家になるつもりが、海外で伝道師に

ヴォーリスは1880年、アメリカ・カンザス州でキリスト教の信仰心篤い両親のもと、2人兄弟の長男として生まれた。幼少期は虚弱な体質で、その体を慮り<sup>おもんばか</sup>一家で空気の良い土地に転居するほどだった。中学生の時、近所で天文台の工事が始まると建築に興味をもつようになる。同じ頃、母の知人に絵の才能を見出され、デッサンや油絵を学んだ。高校生になると建築への興味はさらに増し、将来、建築家になるべく大学へ進学した。

大学ではYMCA（キリスト教青年会）に所属した。22歳の時、学生対象の海外宣教師大会に出席したことでヴォーリスの進路は大きく変わる。そこで聴いた講演に胸を打たれ、海外で伝道活動をしたいと思うようになったのである。大学を卒業するとYMCAが公募していた日本の官立学校教師に採用され、派遣されることとなった。

1905年（明治38年）、近江八幡に降り立った24歳のヴォーリスは希望に満ちていた。派遣先となる県立の商業高校は商人の子弟も多く通っていた。英語教師として教壇に立つだけでなく、放課後に聖書を教えていた彼の授業は生徒たちから人気を集める。日本を飛び出し立身出世したいと夢を描いていた生徒たちにとって、ヴォーリスは英語



1880年、アメリカ・カンザス州出身のキリスト教伝道師、建築家、実業家、社会事業家。その功績により藍綬褒章、黄綬褒章、正五位勲三等瑞宝章の受章の他、近江八幡市名誉市民一号にも任命された。

という言葉だけでなく、世界を教えてくれる存在だったのだろう。だが、周囲の大人たちが見る目は違っていた。聖書を教える外国人に疑念を抱き、ヴォーリスはわずか2年で教師の職を解かれた。

#### ▶▶▶ 利益を元手に社会事業活動に尽力

普通ならその時点で帰国しただろう。あるいは他の国を目指しただろう。しかし、ヴォーリスは失意から立ち直るや、まず建築事務所を立ち上げ、その後30歳で合名会社を設立する。西洋建築に必要な建築資材の輸入など商業高校の教え子たちが右腕となって、ヴォーリスが率いる建築家集団は全国から注文を受けた。教会や学校、ホテルや個人の邸宅といった建築設計に携わる一方、アメリカで製造された軟膏メンソレータムの輸入販売も手掛けた。それらの利益を元手に社会事業活動にも力を入れ、不治の病と恐れられていた結核患者のためサナトリウムを開設するなどしている。

アメリカに長年留学していた子爵の令嬢・<sup>ひとつやなぎ</sup>一柳満喜子と、国籍や身分の違いを超え結婚したのは39歳の時。志を同じくする伴侶を得て、ヴォーリスは幼稚園や学校、図書館の設立など益々社会事業活動に注力していく。

1941年、太平洋戦争が勃発すると、苦悩の末、日本に帰化することを決意。61歳の時である。62歳の時には旧帝国大学等で講師を務め、戦後は日米の会談実現のためにも奔走した。77歳、クモ膜下出血で倒れると療養生活に入り、83歳で永眠。子どもはなく、妻にはささやかな自宅以外の私財は残していない。揺るがぬ信仰と信念を胸に、異国の地で社会のため人々のために捧げた生涯だった。

（執筆／ライター 篠田 りょうこ）